

福音、いのち、そして「生きがい」

(一テサロニケ三・六〜一〇)

「六〇代からは新しい生きがいが必要だ」と書かれたウェブサイトを見つけた。曰く六〇までは仕事や子育てなど生きがいを与えるもの、あるいは課せられた任務としてやらねばならぬことがある。辛いことも多々あるが、そこに生きがいを見出すことはある意味たやすい。しかし子らが巣立ち、定年が近づくとどうだろう。麗々しい名刺はもうない。会社や組織というものの、或いは「〇〇ちゃんママ」といった証明書を失うのだ。これはなかなか大変なことだ。こう聞くと自死大國と呼ばれる我が国で自死が一番多いのが六〇代の男性だというのも何か納得がいくものである。

閑話休題。この手紙を書いた時のパウロは恐らく五〇代と思われるが、彼の人生は輝いている。彼はテサロニケ教会をはじめ多くの教会の問題で苦悩し、ユダヤ人からは迫害を受け、クリスチャンの中でも理解されないこともあった。しかしそのような苦闘のなか、彼は生きがいを持って生きることでできた。以下にパウロを強め、励ましたものを二つ取り上げてみたい。

一、テモテが持ち帰った福音

テサロニケ教会のことが気が気でなくなかったパウロは自らの名代として青年伝道者のテモテを遣わしたのだが、テモテがかの地で見たものはテサロニケ教会の兄弟姉妹たちの真真正正な信仰とイエス・キリストに基礎づけられた愛であった。ここで興味深いのは「良い知らせをもたらしてくれました」と訳されている言葉である。ギリシャ語では「ユウアンゲリソマイ」という言葉であり、「(イエス・キリストの)福音をのべ伝える」という意味で用いることの多い言葉である。そう考えるとテサロニケ教会が信仰と愛に生きていた姿にパウロは主イエス・キリストの福音の具現化を見、それをまさに福音(よき知らせ)そのものとして受け入れたのである。

「コリント一五章で述べられている通り、福音とは旧約聖書に証しされた主イエス・キリストの私たちの罪のための死と救いのための復活の出来事だ。しかし真の福音の告知がなされ、人がそれを受け入れるならそこには必ず変化が起こる。キリストの愛があふれ、キリストに対する信仰が燃え上がり、その共同体には律法を超える御霊の実が実る。パウロによればこの主にあつて作りかえられた信徒の現実もまた福音なのだ。

二、テサロニケ教会から流れるいのち

テモテが持ってきたもう一つの「福音」は激しい苦闘の中に置かれていた使徒パウロの心を慰め、励ました。そうしてパウロは言う。「あなたが主にあつて堅く立つていてくれるなら、私たちは今生きがいがあります(八節)」と。ここで注意しなければならぬのは「生きがい」ということばだ。これだけを読むとなんだかパウロが「牧師冥利に尽きる」的な個人的な自己満足を感じていたように思えるのだが、それではこの個所の意味はだいぶ削られてしまう。というのも原文直訳では「私たちは今生きる者になるのです」となるからである。前段で語ったようにパウロたちにとってテサロニケ信徒たちの信仰生活は「福音」そのものであり、テサロニケ教会がキリストの復活のいのちと愛に生きていた事実は、それを聞くパウロたちに苦難の中でも消えることのない、あらゆる罪の力を超える「いのち」を与えた。よつてパウロの得た「生きがい」は神のいのちを体験した結果だと考えるべきだ。だから大切なことはイエスの福音に完全にコミットし、そのいのちを相互に体験し、福音を分かち合うことである。テサロニケ教会にはそのことが「たれば」的仮定ではなく、現実として起こっており、そのいのちの流れの中でパウロたちもまた生か

され、励まされた。この神のいのちの交流の先に「生きがい」はあるのだ。

* * *

先月母校の六十五周年記念行事があった。仲間達が集結して喜びを分かち合っているのをSNSで見、私も喜んだ。私にとって母校は信仰の原点であるが、そんな私の卒業写真には少し変わったところがある。最前列、博士のガウンをまとう教授たちの中央に学生と同じ修士のガウンを着てにこやかにほほ笑む紳士が一人。誰であろう校長のマイケル・シエン先生である。当時彼は博士論文の執筆を中断し学校経営に奔走していた。神学校は高等教育機関である。居並ぶ博士たちの三本線と金房の角帽の中央に地味な修士のガウンを着て座っているシエン先生の姿には正直違和感を禁じえないのだが、先生の笑顔はそうしたものを超えた、イエスの福音がもたらす「いのち」の輝きにあふれている。そう考えるとこれは実に教育的な絵である。私たちはどうかすると「達成」や「満足」を生きがいにし一喜一憂しやすい。だが真の生きがいは福音にある。定年、肩書の無い名刺、真っ白な予定表。それらの持つ負の力は福音の前では無力化される。主と同信の友の間を流れるいのちに生かされて歩もうではないか。